

巻頭言

教育学部附属教育実践総合センター長
羽賀敏雄

教育実践に関わる研究論文は、科学論文の立場からは軽く見られる傾向にあり、その理由を考えてみる必要があります。方法が明確に記述され、場所、時間、環境その他の条件が変わっていても再現可能であることが科学論文として必要な絶対条件と考えられているからだと思います。

人間がこころをもち、行動が複雑であり、学校、地域、発達段階、題材、表現方法などの要素が加わるので、教育実践研究はいわゆる物語的に見え、再現不可能で学術的でないと思われがちです。

しかし、教育実践研究の重要性は増す一方であり、重く見る方向での努力が各方面で始まりました。既成概念にとらわれず、どのようなフォームで記述するのが良いのかという視点からも検討されるようになってきました。

教育現場に即した実践的論文は生きたものです。対象となる系が複雑だとしても、現に児童生徒と向き合っている教員一人一人の実践と必ず重なる部分があります。私自身は課題提起とそれに対する取り組みなど起承転結がはっきりしていて、内容が伝わりやすいようになっていることが基本的フォームと思っています。

本年度、2月16日の発表会を経て、6人の先生方から6件の論文が提出されました。研究テーマは総合的学習の時間に関するものが3件、国際理解教育が1件、理科教育が1件、表現が1件でいずれも新しい教育課程に即した今日的なテーマです。発表会を含めて5回の研究員会をもち互いに議論して成果を伝えやすいようにしました。

論文を掲載した研究員報告書は、昨年度から国会図書館に登録し、ISSN番号を通して世界中から検索可能になりました。合わせて本センターのホームページに研究の概要を公開致しました。公開された研究成果は日ごろの授業実践に生かすことができます。

本センターは、教育内容・方法等教育実践を対象として教育研究を推進するための共同研究施設として、1988年に設立されています。2001年には教育相談等を扱う教育臨床研究部門を増設し、名称も教育実践研究指導センターから教育実践総合センターに変わりました。センターは地域の教育関係者の方々と力を合わせて地域の教育力の向上にできる限りの貢献を致します。

センターの研究員制度が始まった1992年当初から研究員の指導にあたったセンター専任教官の吹貝賢一教授がこの3月で停年退官されます。中学校教員30年のキャリアを生かして教育現場に即した親しみのあるご指導でした。関係した論文は130篇になります。長い間ありがとうございました。